

16 世紀ポルトガルの奇才・冒険家 フェルナンド・オリヴェイラ

－ “ナウ船の建造の書” の著者－

山田 義裕

日本海事史学会

2006 年 4 月 15 日例会

報告を行うにあたって

フェルナンド・オリヴェイラは生年も没年も不詳であるが、16 世紀のポルトガルに生き、ポルトガルで最古のポルトガル語の文法書を出版し（1536 年）、最古の海戦術の本を出版し（「海戦術」、1555 年）、最古の造船術の書（「造船の書」（「アルス・ナウチカ」：ラテン語）、「ナウ船建造の書」を書いた。（1570 年頃と 1580 年頃に執筆。未出版。）これら海事に関する書物はヨーロッパで最初のものと言ってもよからう。この他にもマゼランの世界一周の報告、ポルトガル史に関する著作も残した。

ドミニコ会の修道士として高い教育を受けたが、修道院を抜け出し、リスボンで有力者（かの「10 年史」を書いたジョアン・デ・バッロス等）の師弟に文法を教えた。その性質は自由かつ冒険を好むもので、言動は歯に衣を着せず辛辣かつ激しく、たびたび舌禍を招いた。その最たるものは、当時ポルトガルに設立（1536 年）されたばかりの宗教裁判所に 2 度にわたり訴えられ、収監されたことである。その冒険を好む性質から、船に乗り込むようになり、他国の捕虜（フランス、イギリス、トルコ）になること度々であった。

この間、イギリス国王ヘンリー 8 世の書簡を母国のジョアン 3 世の元に届けたり、北アフリカでイスラム教徒に捕まった際には、自分を含むポルトガル人捕虜の釈放のためにリスボンに出向いて、交渉を成立させるなど、外交官のような活動も行った。

晩年は造船関係の書の執筆にいそしんだようであるが、不明である。

今回はフェルナンド・オリヴェイラの波乱に富む人生と、著作の概要を紹介するものである。

1. 資料

- 1) 本報告は次の書をポルトガル語から日本語へ翻訳した全文を利用する。
「15-16 世紀ポルトガルの航海者、旅行者、冒険家達 第 2 巻」所載
「フェルナンド・オリヴェイラ ー生まれついで冒険家にして反逆児ー」
ルイス・デ・アルブケルケ著
“NAVEGADORES, VIAJANTES E AVENTUREIROS PORTUGUESES
SÉCULOS XV E XVI 2”
“Fernando Oliveira Um português genial aventureiro e insubmisso”
Por Luís de Albuquerque
また、下の 2)、(1)、③に挙げたフランシスコ・コンテンテ・ドミンゲス著「大洋の船」(Francisco Contente Domingues “Os Navios do Mar Oceano”)の一部の翻訳も利用する。
- 2) フェルナンド・オリヴェイラの著作で参照した資料
 - (1) 「ナウ船の建造の書」(1580 年頃) (Libro da Fábrica das Naus) 手稿、リスボン国立図書館が所蔵
 - ①エンリケ・ロペス・デ・メンドンサ著「フェルナンド・オリヴェイラ神父とその造船の書」(O Padre Fernando Oliveira e a Sua Obra Náutica)、1898 年、リスボン
 - ②リスボン国立図書館所蔵の手稿と上記①のエンリケ・ロペス・デ・メンドンサ著「フェルナンド・オリヴェイラ神父とその造船の書」所載の本文(現代活字版)のファクシミリ版、1991 年、海軍アカデミー出版、リスボン
 - ③フランシスコ・コンテンテ・ドミンゲス著「大洋の船ー16 及び 17 世紀のポルトガルの造船の理論と経験」第 1 部、第 II 章「フェルナンド・オリヴェイラと造船に関する最初のポルトガル語の論文」、第 3 項「ナウ船の建造の書」、2004 年、リスボン
 - (2) 「海戦術論」(Arte da Guerra do Mar)、1555 年、リスボンのファクシミリ版、1983 年、リスボン
 - (3) 「造船の書：アルス・ナウチカ」(1570 年頃)、手稿、オランダのライデン大学図書館が所蔵
 - ①ジョアン・ダ・ガマ・ピメンテル・バラータ著「ポルトガルのルネッサンス期の造船術の研究」第二巻 (Estudos de Arqueologia Naval II)、第 8 章「フェルナンド・オリヴェイラ神父の“造船の書”(アルス・ナウチカ：Ars Nautica)ー航海に関する知識の百科全書にして最初の造船の科学的論文ー(1570 年)」、1998 年、ポルトガル
 - ②ネプチューニア (NEPTUNIA：フランス海軍友の会誌)

165号(1987年3月) 所載 エリック・リエス(Éric Rieth)著「フェルナンド・オリヴェイラの論文」

166号(1987年6月) 所載 エリック・リエス(Éric Rieth)著「16世紀後半の図面(carènes)の考え方のシステム」

169号(1988年3月) 所載 エリック・リエス(Éric Rieth)著「フェルナンド・オリヴェイラの“造船の書”(アルス・ナウチカ)一連の図に関する考察」

③A.マルケス・ピニエイロ著「日本についてのポルトガルの古地図」(A Cartografia Portuguesa do Japon)、1996年、ポルトガル

3) その他の参考図書

- (1)フランシスコ・コンテンテ・ドミンゲス著「16世紀のポルトガルの造船の経験と知識：フェルナンド・オリヴェイラの諸論文」、コインブラ大学報、1985年、コインブラ
- (2)レオン・ブールドン著「フェルナンド・オリヴェイラの生涯の不可思議な(?)エピソード」、コインブラ大学文学部「ポルトガル歴史会報」、1951年、コインブラ
- (3)フィリップ・ヴィエイラ・デ・カストロ著「ポルトガルのナオ船—オリエントの帝国の征服の船(1498年~1650年)—」、2003年、リスボン
- (4)ルイス・デ・アルブケルケ編集「ポルトガルの発見史事典」の「フェルナンド・オリヴェイラの項」、1994年、ポルトガル
- (5)フランシスコ・コンテンテ・ドミンゲス著「ペドロ・ヌーネスの批判者フェルナンド・オリヴェイラ」、2002年、Oceano No.49 所載

4) 上記以外のフェルナンド・オリヴェイラの著作 (山田未見)

- (1)「ポルトガル語の文法」(Gramatica da Linguagem Portuguesa)、1536年、リスボン、1981年にこの初版のファクシミリ版が出ている。
- (2)「フェルナン・デ・マガリャンイスの航海の報告」(Relato da Viagem de Fernão de Magalhães)、1570年頃(?)、オランダのライデン大学所蔵の手稿。1989年に、現代活字化版が出ている。
- (3)「ポルトガル王国の古代、貴族、及びその解放の書」(Libro da Antiguidade, Nobreza, Liberdade e Imunidades)、1581年以降、パリ国立図書館所蔵の手稿。
- (4)「ポルトガルの歴史」(História de Portugal)、1581年以降、パリ国立図書館所蔵の手稿。

2. 生涯における出来事

1507 年頃 A	ポルトガルの海辺のアヴェイラ(Aveira)で生まれたと考えられている。 その根拠は第 1 回の宗教裁判所の審問を受けていた 1547 年 11 月に、自らの生い立ちを申告するに当たって、旧キリスト教徒の子とし、アヴェイラを生誕の地としている。この時、聖ドミニコ会を去って 15 年になると述べ、またこの教団に 9 ないし 10 歳の時からおよそ 25 歳の時までいた、と述べていることによる。両親の身分は低かったようである。
1517 年頃 (10 歳)	10 歳頃からエヴォラのドミニコ会で暮らすようになった。 「私が小さな子供の時はエヴォラの聖ドミニコ会士達の中で育てられたが、その土地の者達は、私が海辺で覚えたことに従って、そのような発音をしたために、私を嘲笑した。」(「ポルトガル語の文法」)
1532 年頃 (25 歳) B	ここで、当時の人文主義者アンドレ・デ・レゼンデ (1492 年にスペイン語の初の文法書を出版したアントニオ・デ・ネブリッハの弟子) に文法を習った可能性がある。
1535 年頃	修道院を逃げ出し、そのほとぼりを冷ますために、数年スペインに滞在した。
1536 年 (29 歳)	ポルトガルに戻り、リスボンに居住した。 「ポルトガル語の文法」を出版。これはポルトガル語の最古の文法書である。
C	この頃、ジョアン・デ・バッロス、アルヴィート男爵、ドン・フェルナンド・アルマーダ等の貴族の子弟に文法、ラテン語、教え、学問の入門の手ほどきを行った。
1541 年頃 (34 歳)	リスボンを離れ、ポルトガル国外に出た。
D	これから 2 年ほどの間、何をしていたかわからない。ローマへ向い、法王庁において諜報活動をしていたのではないかという推論もあるが、なんら確かな根拠はない。
E	バルセローナからジェノヴァへ向かう船に乗船している時に、フランスのガレー船によって捕らえられたようである。フェルナンド・オリヴェイラはそのことを宗教裁判所で証言している。 レオン・ブールドンは、スペインのフェリペ 2 世王の大使としてポルトガルのセバスチャン王の宮廷に滞在していたエルナンド・カリーリョ・デ・メンドーサの 1567 年 9 月 19 日付け覚書の 1 節を見つけた。 「・・・15 年か 16 年前になるが、なにかの恩恵を得るためにローマへ行く途中、(フェルナンド・オリヴェイラは) ジェノヴァに行くためにバルセローナで船に乗ったが、フランスのガレー船が彼を捕らえてしまった。・・・そし

	<p>てこの人物は、航海のことを何かしら知っていることが分かったので、ただちに解放され、3～4年の間、マルセイユにおいてその（ガレー船の）任務に就いた。それ以来フランス人達は彼のことを船乗りとして認めている。」</p> <p>15～16年前というのは1551または52年になり、この時にはフェルナンド・オリヴェイラはリスボンに居たことが確認されているので、レオン・ブールドンは「25～26年前」の書き間違いとした。</p> <p>*<u>謎は何時、何処で「航海のことを習得したか」である。</u></p>
F	
1543年	法王庁の使節と共にポルトガルに戻った。
1545年 (38歳)	リスボンに寄港したフランスのサン・ブランカール男爵が艦長のガレー船にピロートとして雇われて、英国へ向かう。
G	
	<p>英国のヘンリー8世はフランスのフランソワ1世に宣戦布告しており、フランソワ1世はダヌバン提督の要請に応じて、24隻のラウンド・シップと20隻のガレー船と4隻の伝令船を地中海からルアーブルに向かわせ、そこで残りのフランス艦隊と合流して英国を攻撃するための海軍力を組織するよう命じた。ガレー艦隊の指揮官は16世紀のフランス海軍で最も名声が高いラ・ガルドゥ男爵（フェルナンド・オリヴェイラは彼がガレー船を5人権船から4人権船に改善したことについて「海戦術論」の中で言及している）であった。</p> <p>この年に英国海軍で最重要なローズ・マリー号がフランスとの海戦の最中に沈没したが、フェルナンド・オリヴェイラはそれを目撃した可能性がある。</p>
1546年5月	英国とフランスの海軍の小競り合い、アンブレトゥーズの戦いで、サン・ブランカール男爵が艦長のガレー船は英国に捕獲され、これに乗船していたフェルナンド・オリヴェイラも捕虜となり、ロンドンへ連れていかれた。
H	
1547年 (40歳)	サン・ブランカール男爵以下の捕虜釈放交渉に参加し、その功績に対して英国より報奨金を受け取ったようである。そして英国宮廷の信頼を得た。
I	
	この間にヘンリー8世の英国国教会に触れ、カトリックに疑問を持つようになった。それがポルトガル帰国後に言動となって現れ、宗教裁判所に訴えられることとなった。
1547年 10月	ヘンリー8世のドン・ジョアン3世宛ての手紙を携えてポルトガルに帰国した。その際にあまりに派手な世俗の服を纏い、王の不興をかかった。
11月	書籍商ジョアン・ボルゴーニャによって、設立されたばかりの宗教裁判所に訴えられた。その理由は、フェルナンド・オリヴェイラがカトリックを破門されたヘンリー8世を賛美したからであった。
J	
K	裁判所において雄弁に自己弁護を行ったが、さしたる効果はなかった。
1548年3月	裁判所は彼を訓戒に呼び出したところ、次第に服従の態度を見せ始め、ついに「英国の修道院や聖所の破壊を正当化してり、危険を犯した聖トーマスに対する侮辱を正当化する申し立ては棄却します。」と前言を否定した。
L	

1551年8月 (44歳) M	<p>牢から自由になる決裁が下されたのはそれから3年以上経ってからであるが、明白な許可なくしてはポルトガルを出てならない、という条件付であった。</p> <p>N トルコのイスラム教徒に攻められて、北アフリカの「ヴェレスの王」と呼ばれるマグレブの族長がポルトガル王に援助を求める使者を送った。</p>
1552年8月 O	<p>ドン・ジョアン3世はその使者を帰すためのカラヴェラ船を出帆させ、フェルナンド・オリヴェイラはその中の1隻に乗り組んでいた。現地に到着して港に停泊中に、近くを遊弋していたトルコのガレー船に襲われ、百人近くの乗組員と共に捕虜になってしまう。この事件は「海戦術論」中に書かれている。</p>
P	<p>これらの捕虜達の中でフェルナンド・オリヴェイラともう一人の男がリスボンに向いて、ポルトガル国王と身請けの交渉をするために選ばれた。</p>
Q	<p>8ヶ月を経て交渉は成立し、フェルナンド・オリヴェイラは自由の身となった。</p>
1554年 (47歳)	<p>トルコのガレー船に襲われた挿話を交えた「海戦術論」を1554年に執筆し、1555年に同書は出版された。ポルトガルのガレー船団のカピタンであるドン・ヌーノ・ダ・クーニャ宛の1554年10月28日付けの献呈の辞が載せられている。</p>
R	
1555年 10月	<p>フェルナンド・オリヴェイラは宗教裁判所によって捕らえられた可能性がある。しかし、収監、訴訟の書類が一切残されておらず、本当に実行されたかどうか、わからない。</p>
S	<p>ドン・ジョアン3世がドン・ヌーノ・ダ・クーニャの親戚のアントニオ・ダ・クーニャにフェルナンド・オリヴェイラに親切心をもって近づかせ、罠に陥れさせて、逮捕させようとしたようである。これに関する王の一連の書状が残されている。王はフェルナンド・オリヴェイラを嫌っていたが、宗教裁判所に彼を逮捕させようとしたまでの深い動機はわからない。</p>
T	<p>この後9年ほどにわたり、彼の消息を伝える書類は見つかっていない。</p>
1564年 (57歳)	<p>この年の6月22日付けのドン・セバスチャン王の王令が学士でミサの神父としてのフェルナンド・オリヴェイラに2万レアルの恩給を認めている。</p>
U	<p>しかし、この人物が当のフェルナンド・オリヴェイラかどうか、確証はない。あの反逆的で向こう見ずな性格の男が、このような扱いに見合うであろうか。</p>
1566年 (59歳)	<p>フランスへ出国する許可願いが出された。</p>
V	<p>これは、当時の世界がトルデシヤス条約によって二分された状況を、フランスが打破するために、新たな航路、大陸を探そうとして、航海に熟達した人物を求めていたことによる。特にイタリア人のフランチェスコ・ダルバーニョという商人がフランスのエージェントとなってラ・ロシェールに居を構えてスペインとポルトガルでリクルート活動を行っていたのに、フェルナンド・オリヴェイラが興味を示したためであった。結局はフランスに向かっ</p>

<p>1570 年頃 (63 歳) W</p>	<p>た様子は見られない。 「アルス・ノウチカ」を執筆。 「フェルナン・デ・マガリャンイスの航海の報告」を執筆</p>
<p>1580 年頃 (73 歳) X</p>	<p>「ノウ船の建造の書」を執筆。</p>
<p>1581 年以降 Y</p>	<p>「ポルトガル王国の古代、貴族、及びその解放の書」を執筆。 「ポルトガルの歴史」を執筆。 没年不詳。</p>

フェルナンド・オリヴェイラの600トンのナウ船の要目

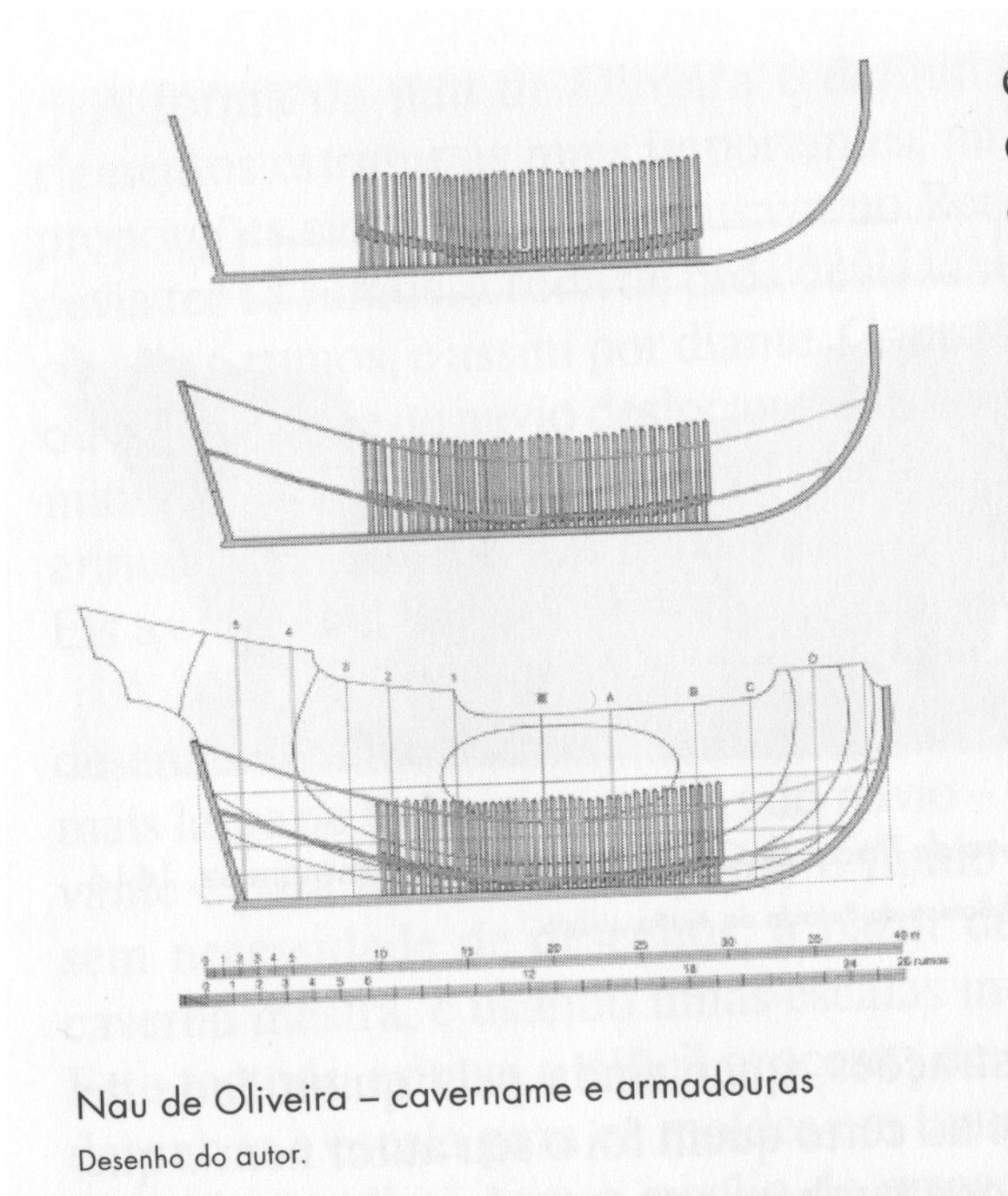
「ナウ船の建造」記載の要目をフィリップ・ヴィエイラ・デ・カストロが1表としたもの

「ポルトガルのナウ船—オリエントの帝国の征服の船（1498年～1650年）—」（2003年）
所載

	項目	プロポーションの比率	メートルでの数値
A	キール Quilha	600トンに18ルモ	27.72
B	船首の船首材の張り出し Lançamento da roda de proa	Aの1/3	9.24
C	船首の船首材の高さ Altura da roda de proa	Aの1/3	9.24
D	船尾支柱の傾斜 Inclinação do codaste	Aの1/3の1/4	2.31
E	船尾支柱の高さ Altura do codaste	Aの1/3	9.24
F	横梁(ビーム) Boca	Aの1/3から1/2	9.24～13.86
G	プラン（船底部の横幅） Plão	Fの1/3から1/2	3.08～6.93
H	対(ペア)Par	1パルモ・テ・ゴア +1パルモ・テ・ウアラ	0.48
I	船底の立上り Levantamento do fundo	船首方向へ H 船尾方向へ 1.5H	0.48 0.72
J	船底の狭まり Recolhimento do fundo	Gの1/6	0.68
K	船尾支柱のランの高さ Altura dos delgados no codaste	Eの1/3から始まる	3.08
L	メインランサム幅 Largura do gio	Fの1/2	6.16
M	上甲板の最大横梁 Máxima boca no convés	F-(>1+1パルモ・テ・ゴア)	11.81
N	船倉の高さ Altura do porão	14パルモ・テ・ゴア	3.59
O	第二甲板の高さ Altura da segunda coberta	9パルモ・テ・ゴア	2.31
P	第一甲板の高さ Altura da primeira coberta	9パルモ・テ・ゴア	2.31
Q	船首楼の長さ Comprimento do castelo de popa	上甲板長の1/2 (B+A+B)	20.46
R	コターテッキの高さ Altura da tolda	8パルモ・テ・ゴア	2.05
S	チャピテウの長さ Comprimento do chapitéu	Qの1/2	13.86
T	チャピテウの高さ Altura do chapitéu	7パルモ・テ・ゴア	1.80
U	船尾楼の長さ Comprimento do castelo de proa	Mの1/2	5.96
V	船尾楼の高さ Altura do castelo de proa	Mの1/3	3.94
W	上甲板のマリアージュの高さ Altura do mareagem no convés	1ルモ	1.54

X	両楼のマレージエンの高さ nos castelos	3 半ポルモ・デ・ゴア	0.77
Y	垂線間長 Comprimento entre perpendiculares	A+B+D	39.27

フィリップ・ヴィエイラ・デ・カストロによるフェルナンド・オリヴェイラのナウ船の作図



「アルス・ナウチカ」中の図をオランダのニコラス・ヴィッツセン(Nicolaas Witsen)がその著「Aeloude en hedengaegsche scheeps-bouw en bestier」(1671年)中に転載したもの。「アルス・ナウチカ」とは左右が反対になっている。ニコラス・ヴィッツセンはオランダ東インド会社のアムステルダム評議会の役員の1名で、多くの著書がある。

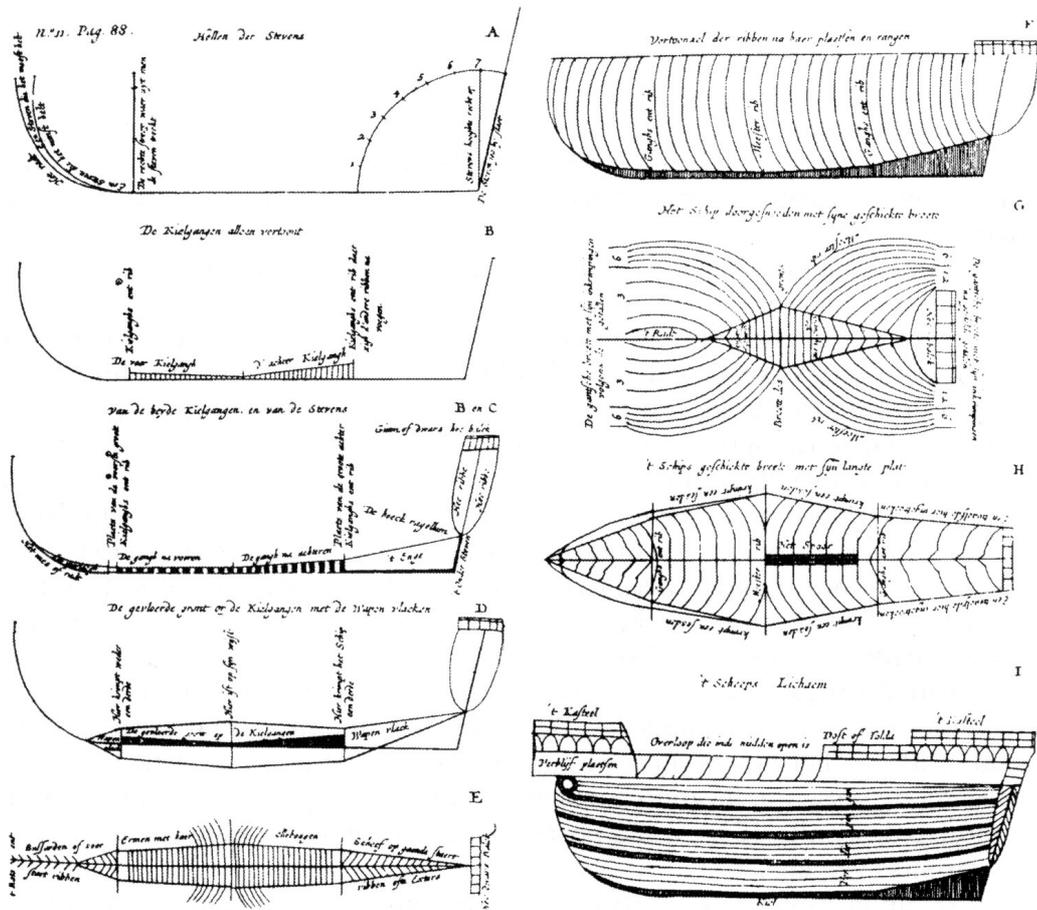


Fig. 4 – Desenhos da Ars Nautica de Fernando Oliveira reproduzidos por Nicolaas Witsen, Aeloude en hedengaegsche scheeps-bouw en bestier, de 1671: os desenhos estão invertidos em relação ao original.

